かたりべ105

豊島区立郷土資料館だより

右　はじめに簡単なブレスレットから、呼吸をあわせて組み上げた。所用時間は約５分。
左　次は、少々長く細い糸で、ネックレスの紐に挑戦。
左下　上の紐は、ふたりとも右手に黄色、左手にオレンジ色を持って組んだもの。下は、ひとりが、左右の手に同じ色の糸を持って組んだもの。できあがりの模様がかわる。

ふたりで作る組紐（くみひも）―「手」と「足の指」を道具に―

着物を着る人や機会が少なくなり、着物の名脇役としての羽織紐（はおりひも）や帯締（おびじ）めに接することがまれになってきました。しかし、だれもが日常的に着物を着ていたころ、それらは必需品で、ひとりで何本も持っていました。そのため、組紐職人も多く、互いの技を競いあいました。特に、一九四五（昭和二〇）年以前の豊島区では、都内でも組紐職人の数が多くいました。当館では、明治時代から一九七〇年代に作られた組紐の製品・見本組を多数保存しており、折につけ、展示しています。

さて、このような歴史的背景から、誰もが、より身近に組紐に接することはできないかと考え、三月三日（土曜日）に、体験講座「組紐でブレスレットを作ろう」を開催しました。紐を組むための道具の丸台や組玉等は使いません。人の手と足の指を使うだけです。そうです、身体が道具なのです。この方法は、八〇歳以上の女性のなかでは、日々の生活で経験がある人という人も決して少なくはありません。筆者の母は、小学生のときに叔母たちからこの方法を教えられました。冬、綿入れのはんてんを着ますが、前がはだけないように左右の身頃に羽織紐をつけます。その紐を、色を変えた毛糸で作りました。そのことが、この講座を開催したきっかけでした。

作り方は簡単です。毛糸を一定の長さに切ります。その長さの中央を丸く結び、それにひとりが、足の親指を入れて押さえます。ふたりが向かい合い、四つに分けた紐の両端をふたりがそれぞれに持ち、息を合わせ、糸を互い違いにして組み上げます。今回は、毛糸・刺し子の糸・刺繍糸で、キーホルダー・ブレスレット・ネックレスを作りました。単純な組み方ですが、糸の素材・太さ・色等を変えれば無限にできます。受講生のみなさんが互いに教え合い、思いついた工夫を盛り込み、二時間は、またたくまに過ぎました。（福岡）

セピア色の記憶

第27回　焼け野原からの出発

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和二一年頃と現在（二〇一二年一月撮影）の池袋本町二丁目二八番付近の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、→印は撮影方向を示しています。

上写真では、焼け野原を貫く一本道を一台の自転車が走っていく姿が何とも印象的です。また、写真奥に向かって道沿いに延々と続く電柱も目をひきます。

すでに皆さんおわかりのように、日本はかつてアメリカや中国などと戦争をしていました（アジア太平洋戦争）。この間、豊島区域は昭和一九（一九四四）年一二月一二日の初空襲後、合計一〇回の空襲を受けましたが、昭和二〇年四月一三日の深夜から一四日の未明にかけての空襲が最も被害が大きく、豊島区域の約三分の二を焼き尽くしたほか、現在の北区・板橋区・文京区・新宿区などにも大きな被害をもたらしました（以下、この空襲のことをここでは「四・一三〈よんてんいちさん〉空襲」とします）。

写真の池袋本町地区も「四・一三空襲」で相当部分が焼失しましたが、現在の池袋本町二丁目に所在する重林寺（じゅうりんじ）は奇跡的に焼け残り、この地に焼失した池袋警察署の仮事務所が一時期設置されました。そして、豊島区全体では死者七七八名、負傷者二五二三名、被災者一六万一六六一名、罹災家屋（りさいかおく）三万四〇〇〇戸という甚大な被害が報告されています。

一般に、東京へ大きな被害を与えた空襲といった場合、一九四五年三月一〇日のいわゆる「東京大空襲」がよく知られています。しかしながら、「東京大空襲」はおもに東京の下町地域が壊滅的な被害を受け、豊島区やその周辺地域の被害は比較的軽いものでした。それに対し、「四・一三空襲」は、先に示したように、豊島区をはじめとする東京の城北地域に大きな被害をもたらしました。

あと数年で東京空襲七〇年を迎えます。当時の状況を記憶している人たちが徐々に減っていくなか、少なくとも「東京大空襲」の三月一〇日と「四・一三空襲」の四月一三日の両日は、戦争の悲惨さと平和の尊さを考え、次の世代に正しく伝えていく日としたいものです。（秋山）

氷川神社参道入口付近

焼夷弾　～アジア太平洋戦争の考古学～

豊島の遺跡 第九回

区内の発掘調査では、多くの場所でアジア太平洋戦争の傷跡が最初に見つかります。駒込・巣鴨地区や東池袋地区などでは空襲で焼かれた残骸を埋めたゴミ穴が頻繁に発見され、焼け爛れたガラス瓶などが出土しています。また防空壕も、駒込、巣鴨、北大塚、東池袋、西池袋、雑司が谷、池袋本町等々、区内各地で発見されています。

※　※

ところで、巣鴨三丁目の発掘調査では、一面が真っ赤な焼け土に覆われた場所に遭遇したことがあります。土層の観察から、アジア太平洋戦争中の空襲で焼けた痕跡と判断されました。残されている記録等から、一九四五年四月一三日の「四・一三空襲」の時のものではないかと推測されます。この焼け土の下からは、数棟の建物跡が姿を現しました。そしてこの中の一棟では、礎石の近くから、焼夷弾が地面に突き刺さったまま発見されたのです。住宅の屋根や床を突き破り、三〇cm程が地面にめり込んだのでしょう（写真）。注意深く匂いを嗅ぐと、かすかに石油とゴムを練ったような匂いがします。不発弾だったのでしょうか。この調査では、焼夷弾が複数発見されました。

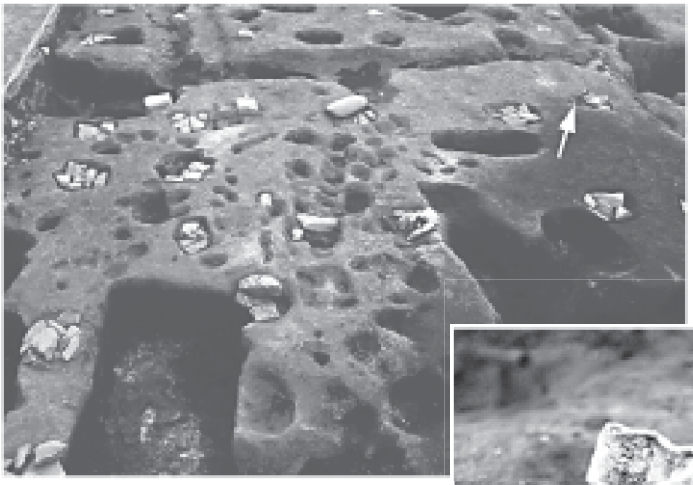
発見された焼夷弾は〝M69焼夷弾〟と呼ばれ、一発あたりの大きさは、直径八cm・全長五〇cm・重量八ポンド（約2.7kg）で、断面の形が六角形の筒状をしています。このM69焼夷弾三八発が、〝E69集束焼夷弾〟という親弾に内蔵され、豊島区の上空にも投下されたのです。E46集束焼夷弾は、木造の日本家屋を効率的に焼き払うためアジア太平洋戦争時に米軍が開発したものといわれ、投下して数秒後にM69焼夷弾が分離して飛び散り、一斉に地上に降り注ぐ仕組みになっていました。巣鴨三丁目一帯は、区内でもこのM69焼夷弾の出土する頻度が高い場所の一つです。

巣鴨三丁目では、空襲で焼けた一軒の住宅の跡から、夫婦茶碗と思われる大小の湯飲茶碗や化粧瓶・アイロン・オハジキ・石蹴用オハジキ等々が、他の焼け爛れた道具類とともに出土したこともあります。少なくとも、夫婦とオハジキや石蹴りで遊ぶ年頃の女の子の三人が、ここで生活していたことを窺わせる遺物でした。この家族の日常生活の営みは、降り注ぐM69焼夷弾によって一瞬のうちに断ち切られてしまったのでしょうか。

※　※　※

以上のような形で遭遇する戦争の生々しい傷跡の上に立った時、市民をも巻き込んだ無差別爆撃の恐ろしさに震撼せざるを得ません。

豊島区内のみならず、おそらく全国各地の地下に空襲の傷跡は残っています。戦争体験の語り継ぎとともに、そのような地下に眠る傷跡も、戦争の実像を伝える大切な証人です。私たちは、市民にとっての戦争の残酷さ、悲惨さを決して忘れてはいけないと思うのです。（橋口）



焼失した住宅の礎石
（右上矢印に焼夷弾）

礎石脇に突き刺さった焼夷弾
※写真はいずれも文化財係提供

新連載　「絵はがきは語る」（1）　絵はがきブームの到来！

■時代を映す絵はがき

郷土資料館では、これまで約一五〇〇件の絵はがきを資料として受入れ、整理してきました。一枚ものの絵はがきもありますが、数枚がセットになった袋入り絵はがき（未使用）の割合が高く、枚数にすると計九〇〇〇枚以上になります。明治末期から昭和四〇年代の絵はがきが中心ですが、そのほとんどが区民の方からの寄贈によるものです。

現在のようにカメラやマスメディアが普及・発達する以前、明治期から昭和前期までの絵はがきは、戦争や災害、事件、記念事業など、社会の様々な出来事や情報を、写真や絵で記録・宣伝する役割を担っていました。あらゆる分野にわたって多種多様な絵はがきが発行されたことから、時代・世相を映すメディアとして、その資料的価値は高いといえるでしょう。絵はがきの大量寄贈が多いことからも、当時の人々の絵はがきへの関心の高さとその人気ぶりがうかがわれます。

■絵はがきブームの到来

日本で私製はがきの発行が許可されるのは、明治三三（一九〇〇）年のことです。それ以前は外国製のものや外国人向けの土産用が主でした。その二年後には、万国郵便連合加盟二五周年を記念して、逓信省（現郵政省）による最初の官製絵はがきが誕生します。そして、絵はがきの一大ブームの火付け役となったのが、日露戦争の戦役記念絵はがきでした。

逓信省は、明治三七年九月から三九年五月にかけて、日露戦争の実況を国内外に広く宣伝するとともに、出征兵士が戦地で使用する「軍事郵便」はがきを慰問用に寄贈するため、八回にわたり一七種類の記念絵はがきを発行しました。当館には、第一回（六枚組、一二銭）から第五回（三枚組、二〇銭）までの絵はがきが収蔵されています。

「鴨緑江ノ砲戦」（写真）はそのうちの一枚で、アール・ヌーボー調の絵が石版色刷りで描かれ、中央にアートタイプ版で写真が配置されたデザインで、当時の高度な印刷技術が採用されています。これら一連の戦役記念絵はがきは、発売日のたびに郵便局に客が殺到し、長蛇の列ができました。特に記念日付印（スタンプ）の押印希望者が多く、「明治三十九年五月三十日海軍記念日絵葉書押印の光景」と題する東京郵便局の行列の様子が絵はがきになるほどの熱狂ぶりでした。

絵はがきの人気の高まりとともに、絵はがきを作成・販売する業者や絵はがき店、専門雑誌が次々と登場し、絵はがきは庶民に身近なメディアとして定着していったのです。

（横山）

【参考資料】「かたりべ」四一号、一九九六年。特別展図録『巷の目撃者』新宿区立新宿歴史博物館、一九九九年。

編集後記

三月一〇日・一一日と「かたりべ」の最終編集作業をしました。この日は六七年前の東京大空襲、一年前の東日本大震災と、辛く厳しい出来事が起きた日でもあります。

そして、「二〇一二年度の収蔵資料展」オープンの日は、豊島区を襲った「四・一三空襲」の日と重なります。

資料館は、そのような忘れてはならない、語り継がなければいけない重たい歴史を、地域の皆さんに知ってもらうことも大切な役割ではないかと思っています。

ことのほか寒さの厳しかったこの冬も、ようやく終わりを告げ、再び春の温もりが訪れてきています。その中で資料館でも、新年度に向けて新たな気持ちで活動を始めました。春の収蔵資料展にぜひ足をお運びください。

（は）

かたりべ
No.105
・
2012年３月30日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋２-37-４
豊島区立勤労福祉会館７階
・
電話 03-3980-2351
URL：http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/